

## R. ムージルの『特性のない男』について (四)

—特性のない男と街路の諸場面—

藤 井 忠

## I. 街路、抽象化と二重性の強調

大西洋上の気象の記述から始まる第1章は、ハプスブルク帝国の首都の道路状況を鳥瞰し、大都会に渦まきさまざまのリズムの混乱と不協和を表現しながら、とある通りへまいおりて、やがて人だかりのむこうに横たわるトラックに轢かれた男にたどりついた。章が変わると、窓から帝都の街路をじっと眺めている男がいる。特性のない男の登場である。前回、小説の空間要素のひとつであるこの窓際という位置をテーマに、窓際に立つ特性のない男の問題性と関係させながらいくつかの場面にそくして考えてみた<sup>1)</sup>。窓際では当然「見る」ことが主になったが、主人公がいま凝視するそのウィーンの街路をこんどは彼自身が歩く。そういう「街を歩く」場面が小説のなかにいくどか描かれる。窓際では、部屋の内部と外部を分離し結合する「窓」が、そのかたわらに立つ主人公の知覚に独得の作用をおよぼしたが、いまや主人公は外部の空気に身をさらして、何ものかを経験することとなる。街路もまた、この長編小説における「意識空間」<sup>2)</sup>のひとつである。

ところで、室内、窓際、街路、あるいは庭などの小説空間を包括するウィーンという都市について言えば、冒頭に紹介したように、型通り第1章において小説の時と場所の設定がまず行われる。だがその描写から浮かびあがるのは、1913年のウィーンと記されながら、しかし、ウィーンではあるがウィーン以外の、もっと時間

をとびこしたある現代的な大都市でもありうるという「交換可能」な都市の姿であり<sup>3)</sup>、この都市描写をあらわすに、「抽象化」、「特性喪失」<sup>4)</sup>、あるいはまた「無名性」<sup>5)</sup>の語をここに連ねることもできる。街路における経験にもこの都市描写の特徴は反映するであろうことは予感される。これは窓から彼の眺める街路の光景についてもいえることである。

特性のない男は独得の仕方で見えていた。すなわち「淡緑色のフィルターをかけたような庭の空気を通して」、褐色がかった街路を眺め、そのあわたたしい動きで「自分の網膜をみたし」ながら、時計を手にして自動車や馬車や市電や通行人の顔などを「数えて」いた。街路の具体的事物に直接目を注ぐのではなく、茫漠とした空間を間にはさんだ、しかも奇妙に精密な観察の姿勢であり、「生体解剖氏の手記」に記される百米の厚さの氷の下に横たわって外界を見る目を思わせる。隔絶された無音の領域において総体として知覚される無機的な世界である<sup>6)</sup>。叙述されるのは、細部に視線を注ぎながら、具体性を無視して全体量を知覚しようとしている頭脳が描くイメージである。脳裡に浮かんでいるのは、街路の流れのなかで費やされる総体として途方もない量の無名のエネルギーと、そのような力の放出にともなう無目的性ということであるが、それは、街の通りを見ている特性なき男のあり方と無縁ではない。そして彼自身がこんどは街路を歩いて、物を見るわけである。その際、独得の目、独得の「抽象化」

にであうことになろう。

ある秋の午後4時頃、ウルリヒが街を歩いている。第1巻34章の光景である。

「晩春を思わず秋の日が彼を幸福にした。空気は発酵していた。ひとびとの顔は川面を漂う泡の趣をたたえていた。思索の単調な緊張を数日すごしたいま、彼は、牢獄から心地よい湯舟に移されたような感じがした。彼はこの気分にあふさわしく愛想よくしなやかに歩こうとつとめた。スポーツで鍛えぬいた肉体には、運動と闘争に即座に移行できる用意があるものだが、今日の彼にはそうしたものがしばしばうわべだけの、偽りの情熱にみたされた老喜劇役者の顔のように不快におもえた。これと同じ仕方で、真理を求める努力が彼の内部を精神の運動形式でみたしていたのである。それは内部を解体して相互に鍛えあう思想のグループに分け、すべてのもの（誠実さですら）が習慣化する瞬間にとる表現、厳密に言えば偽りの喜劇役者的な表現を、自己の内面にあたえるのである。そのように彼は考えていた。こういう言い方がゆるされるなら、彼はひとつの波になって、兄弟たちの波とともに流れていった。孤独のなかで仕事をし、疲れ果てたひとりの人間が、共同体にもどってきて、彼らと同じ方向へ流れていく幸福を感じるたびに、そうした比喩をもちいていけないことがあるか。」(S.129)

いつものように、細部においてたえず転換の予感をはらんだ、油断のできぬ叙述で街路を歩く場面は書きはじめられている。窓から眺めたときに予感された巨大なエネルギー放出の気配こそないが、個の存在を剝ぎとられた人間が、水面に漂う「顔・泡」の集団となり波となって路上をみたしている光景は、まさに現代都市のそれである。それを「心地よい湯舟」とウルリヒは感じている。

コントラストが問題である。水に漂う「顔・泡」は、習慣によって孤独な男の身にできあがった「老喜劇役者の顔」と、「湯舟」は孤独な

思索の場・「牢獄」と対置されている。内面の形式化習慣化を描く屈折した叙述にたいして、「心地よい湯舟・兄弟たちの波・幸福」などの語は無限定のたゆたいのなかにある。二つの領域のこのあまりに単純な対照が暗示するのは、両者の落差と、そして空間的移行に際して生じたかもしれない衝撃である。移行した空間においてウルリヒは、いままでいた自己の場の問題性をありありと思いがくのである。

事実、「ひとすじの熱い光線と冷えきった周囲の壁」というコントラストからなる題名のこの章は、ウルリヒが仕事をつづける気にならず、外へ出てみようとして、何気なく自分の住む家のなかを見回すところから始まるが、そこにすでに自己のいる空間に変化が生じていた。

彼をとり囲んでいるものに突然微妙な変化が起こる。表を飾っていたものが、不意に「剥げ落ちる」のである。「感情と外界との間に流れているひそかな均衡」の瞬間的な乱れ等へとそれは発展するが、基調となるのは、通常の習慣化した営為または概念のなかに起きる一瞬の狂いであり、これら現象は、「歩行」という日常的動作にふと生じる不安の感情へと集約される。

「重心を持ち上げて、前方へずらし、下ろす。しかしそこに僅かの変化が起き、つまり未来へ自己を下ろすことに、ほんのすこしでも怖気づいたり、それを訝ったりすると、もう直立していられなくなるのだ。」(S.128)

日頃見慣れているものに突如小さな亀裂が生じて、物事が見通される。またそうした角度からこの場面は一般にとらえられている。例えば、Renate von Heydebrand は、「習慣の力」と「現実の定式化」にたいする認識の瞬間としてこの光景を扱い<sup>7)</sup>、特性喪失と抽象化を関連させながら論を展開する Jochen Schmidt は、ウルリヒは突然、自己の環境をもはや習慣的な形ではなく、「円い線、交差する線、直線」(S.128)の不安定なシステムとして、つまり抽象的に知覚するのであると言う<sup>8)</sup>。

主として、習慣的に表面を覆っているものが

剥がれそしてそこから得られる認識に目は向けられるが、ウルリヒが歩く街路をひとつの認識空間として見ることは彼らの射程には入っていない。そのなかで、注5に記したように、小説空間としてウィーンという都市を見ようとする傾向は最近顕著になっていて、Karl Konrad Polheim も、「一定の現実としてのウィーン」と「可能性としてのウィーン」という二重性を踏まえ、ウィーンが「似たようなことが起きる」都市であるとともに、それと対置されるところの、「別の状態」の理念を具現する都市でもあると言う。その具体的事象として、「似たようなことが起きる」ことの象徴としての「市電」とその対立要素として「街路を歩くこと」が指摘されているのである<sup>9)</sup>。しかし、そのような対立項目の展開の模様よりも、ひとつの光景にもうすこし目を注ぐことを欲する本論は、むしろ、先の J. Schmidt の言う「抽象化」の語を手にして、あの無名の顔の集団にもどることにしたいと思う。

Schmidt によると、抽象化は「特性喪失というプログラムにおいてひとつの進歩」であり、「古い仮象的価値の否定」<sup>10)</sup>である。だが Schmidt はまた、「抽象化されたものとは、現実を燃えつくしたその燃えかすである」<sup>11)</sup>という言い方をしている、それが先の表層の「剝落」に合うかどうかは別にしても、こういう無機的表現のほうに、ムージルの小説でいま起きていることにかなっている。というのも、顔があぶくのように水面に漂っているということは、あの生体解剖氏の百米の厚みの氷の下から見たときに目に映るであろう風景に似て、静止せる無音の領域での事象であるからだ。「剝落」ということで言えば、事は時に表層的領域での、より単純に容赦なく「剥ぎ取る」ことではないのかと思う。ムージルの文を用いれば「偽りの情熱にみたされた老喜劇役者の顔」の、その化粧を剥ぎ落とすことに似てはいないか。化粧を剥いだその下から喜劇役者の青ざめた素顔がはっと出るが、しかしそれで「真」が現れるわけではない。問

題は、役者の特性を喪失したときの異質の感じ、何ものかがむき出しになった感じである。化粧を落とした顔も見慣れればただの顔にすぎないにしても。いや、そういうただの顔が水面に浮かんでいる、といったほうがよいかももしれない。特性のない男はいま無名の顔の集団の波と融合しているかのようである。しかし、つぎの文はまた新たな屈折を含む。街路での経験の二重性が明らかになる。

「ウルリヒは十年あるいは十五年前にこうした街路での瞬間が彼にとってどのようなものであったかを思い出した。そこではすべてが倍も輝いていた。しかしこの煮えたぎる若き欲求のなかに、はっきりと、囚われているという苦しい予感がこもっていた。自分が獲得したとと思っている一切のものによってじつは自分が獲得されるという、不安な感じを一方でいただいていた。」(S.129)

「街を歩く」ことは、いまが初めての経験ではなかったことを知らされる。忘れられた「ある少佐夫人との恋愛事件」が彼の脳裡にいくどか甦るように、この経験が突然思い起こされている。遠くのほうから呼び起こされた街路は、ある輝かしさと同時に囚われているという感情をいただく二重の経験の場であることを告げる。

しかもこの街路場面は、34章で思い出されるだけではない。少佐夫人との事件ほどではないが、「街を歩く」ことはひとつの固定した光景として、小説のなかで、すなわち第2巻8章・12章、そして「遺稿より」の47章・50章において、くり返し現れるのである。反復のなかで街路の光景は上記の「二重性」をより明らかにしていくであろう。

第2巻8章では、ウルリヒとアガーテの会話のなかで「目的なく街を歩いた」経験がウルリヒによって語られる。しかし先の34章の場面を踏まえているようであり別の時の経験でもあるというあいまいさがこの光景にともない、街路をひとつの独立した小説空間にしている。

「今日なお個人的運命と呼ばれているものも、

集団の、結局は統計的にとらえられる出来事に押しつけられるのだ」というウルリヒの言葉が発端であった。(第1章の最後で、道路わきに横たわる交通事故の犠牲者が通りかかった二人の上品な男女の会話のなかで、単なる統計的一事項として処理されたことを想起させる言葉である。あのとき街路を眺めるウルリヒがむろんその現場を見たわけではないが、遠く離れたところで事柄は関連しあっていく。)そしてなんの目的もなく街を歩いたときの体験へと話題はすすんで、つぎのような情景が提示される。

「個人ではなく、顔の統計しか問題にならないことを確信することで異質の場所に踏みこんだという気持ちはつよまり、体験の緊張はたかまる。身体から引きちぎられた腕・脚・歯がいくつかの軍団に統合され、未来を担いつつ行進している」(S.723)と。

集団のなかでの「心地よい湯舟」の感じは、解体された個人の肉体的部分からなるグロテスクな軍団のイメージによって補完されねばならないことを知る。解体という現代の状況はより鋭く表現され、しかも個人の解体によって成立する集団に「未来は属している」という苦い認識が書きそえられている。そのような集団に加わった彼は、「まだ完全にひとり孤立した人間として歩いている自分が、まさに反社会的な犯罪者的な存在であるような感じ」をすでにいだかざるをえない。

しかし、とウルリヒは語る、このような光景になおしばらく身をゆだねていると、思いがけなくも、「愚かしいような肉体的な心地よさと無責任な気持ち」がそこからわいてきて、肉体は、感覚的な自我のせまい世界を脱出して、「目覚めることなき甘美にみちあふれた世界」に属するかのよう思えるのだ(S.723)と。ここに到ってわれわれは第1巻34章の、集団の流れに身をまかせる「幸福」にたどりつくが、だがすでに二面性の、一種の断層の一方にその幸福は懸かっているのである。

しかしこの引き裂かれた肉体的部分よりなる

無名の集団を語ることが、ユートピア的領域の言及のきっかけになるのを見るとき、読む者は奇妙なディレンマのようなものをおぼえざるをえない。その部分を引用してみる。

「しかし、こうしたことになおも身をまかせていると、思いがけなくもある愚かしいような肉体的な心地よさと無責任な気持ちがそこから生まれてくるのだ。あたかも肉体はもはや、感覚的な自我が小さな神経索や神経管に閉じこめられている世界ではなく、目覚めることなき甘美にみちあふれた世界に属するかのようである。このような言葉で、ウルリヒは妹に目標も野心もない状態もたらす結果、個性という空想の価値低下の結果がなんであるか、そしてまたおそらくは《神々の原神話》、彼が獵師のようにあとを追っているあの《自然の二重の顔》、あの《与えつつ見ること》と《奪いつつ見ること》にはほかならぬものについて説明したのであった。」(S.723)

ウルリヒとアガーテとの千年王国をめぐる「聖なる会話」はほとんどつねにこのようなアイロニカルな文脈をくぐっていく。個の解体のあとの荒涼とした風景が、神秘的体験の会話にかかわっているのである。街路を行く人々は現代都市の群衆を表現しているようでいて、しかしそれはさらにまた泡の漂い、あるいは揺れる波として、ウルリヒの思考のあなたに予感される茫洋たる無音の静止して見える一連の風景につらなる気配を示しているのである。

だが彼が説明したく思っていることそのものが二重性からなっていて、彼はそれを、「軽い意識の分裂のようなもの」というかたちでアガーテに説明する。すなわち、「抱擁されている」ことを感じながら一方で「目覚めている」ということで、神秘的状態への傾斜と醒めきった知性の二極そのものが問題となっているのである。そして話題もまた、われわれの内部の「二つの比較的独立した生の層」、あるいは「二つの運命(活動的で重要でない、成就される運命と静かで重要な、けっして経験されない運命)」へと

発展していくのであった。(23/724)

この「二つの層」の問題は、第2巻12章において「街を歩く」ことと関係して再び取り上げられる。神秘思想家たちの文を話題にして、「無限の優しさと無限の孤独の間の、どこかにあってどこにもないユートピア的領域」についてウルリヒが語ったときに、アガーテが突然、こう言った。「それはいつかあなたが、わたしたちの内部に重なってある二つの層と名づけたもののことだわ」「ぼくが——いつ?」「あなたが目的なしに街へいらったことがあったわね。自分が街のなかに溶解していくような気がしたけれど、同時にあなたは街が好きになれなかったということでしたね」(S. 754)と。

「街を歩く」場面はここではもう話の展開のきっかけでしかないように見える。しかし唐突な想起、不意の出現によって、それは独得の二重性の場として一定のイメージを喚起するものとなる。一方、あの街路の異様な無名の集団は再び姿を現すことはないのである。

第2巻22章では、家にむかうために市電に乗ったウルリヒが「市電」と「街路」との「視覚的衝突」を経験する場面(S. 872)があり、市電を降りた彼は、「地下室(Keller)から出てきたような」気がするのである<sup>10)</sup>。——第1巻34章では家を出たウルリヒは「牢獄(Kerker)を出たような」感じを覚えた。——このような空間的移行を行ったウルリヒの歩く街は「喜びにはしゃぐような声をあげ、早熟な夏の日のような温もりにみちていた。」商店街を歩く彼は店を飾る品々を「まるではじめて見るように」驚きの目で見ると。彼の頭にはアガーテと話した「千年王国」のことが去来している。彼はアガーテを想う。

さらに第2巻28章では、市電のなかで出会った不思議な美少女のことをウルリヒが語る場面がある。そのとき彼は「すべての秩序が遠のくような気がした」と言う。この話を彼はアガーテと腕を組んで街を歩きながらしていた。にぎ

やかな市場の様子が手短かに描写される。「大気は働く人々の興奮した騒がしい声にみち、太陽の匂いがした」(S. 944)と。

「遺稿より」47章になると、ウルリヒとアガーテが街を歩く姿が見られる。しかし、「群衆のなかを歩く」と題されているが、「大都会の流れ」という表現のみで、彼らは家を出ると、「ただ大都会の流れにしたがって」歩き、「彼らから日常の責任を奪いとる異なった生活の流れに加わることを喜びとした。自己の生活への責任から一瞬のがれた二人は、「自分たちの生きる都市をまだいちどもこれほど美しく、また同時にこれほどよそよそしく感じたことはない」(S. 1096)のである。感じ方の二重性は、「ある奇妙な分裂」、「生の独得の二面性」についての考察をうながす(S. 1096/1097)<sup>11)</sup>。そして「遺稿より」50章では、アガーテが、二人で街を歩いた時のこと(しかしいつの日のことかはわからぬが)を書き留めたウルリヒの日記を読む。日記に記される街の情景は輝きにみちていて、第1巻34章で想起された、若き日の街路での輝かしい経験を思わせるのである。しかしその場面でも、すべてがきわめて自然に進行しているが、「にもかかわらず、奇妙に荒涼たる感じのものがある」(S. 1126)と記されていた。

こうして街路の場面を見てくると、街路の光景そのものが二重の感じ方をさせるとともに、そこで思考される事柄がその二面性を強調していくことがわかる。しかも「二重性という十字架を背負う」感情(S. 1129)は、存在の二面性にたえなければならぬのである。

無論、ウルリヒの思考は街路以外の場所でもたえず二つの極の間で行われている。では、街路の特徴は何か。「窓」がそれ自身は無色で、ただ分離と結合の地点としての機能を果たし、むしろ何もみずから示さぬことでいわば純粹にその機能を発揮するのであるが、街路の場合はそれとすこし異なって、それ自身が独自の光景を

まず示し、またそこに立つ建築物を通してウルリヒに想念を起こさせる。しかし、そのつどの街路の光景とはもはや直接関係をもたぬ事柄についても二重性が強調されていることに、街路の機能を読みとらなければならない。窓におけると同じく、街路では、その具体的な光景や建物のおよぼす作用を超えた、ひとつの空間としての機能が働いていると考えざるをえない。その意味で、街路は街路であるが、しかし単なる街路ではないということになる<sup>12)</sup>。それは関係のなかになりたつ機能であって、ウルリヒの思考の場である「室内」、平行運動の場のひとつディオティーマの「サロン」などと対置する場として、あるいは「市電」からの移行・脱出の場として、そのつどの空間的関係のなかで機能を発揮しているのである。

空間的關係ということから、ある空間から街路に移行するときの落差が街路の光景に影響すること、街路の様相は、とくにそれまでウルリヒを拘束していた空間の内的圧迫の濃度によって微妙に異なるであろうことがまた考えられる。たとえば、ウルリヒの孤独な思考実験の場である彼の室内を「窓ガラスが見た」ときの模様が第1巻のなかでつぎのように描かれる。「使いはたされた思考が、部屋のなかをぐるりと取り巻いて坐っていた。ちょうど弁護士の控えの間で依頼人たちが彼に不満をいだいて坐りこんでいるように」(S.257)と。第1巻ではこういうかたちで彼の思考実験の、ある荒涼たる風景を室内が表現するのであるが、こうしたウルリヒの部屋、つまり「牢獄」から街路に出たときに、街路は「顔・泡」が漂っていたわけである。この場合、直接的な主観の反映として光景を受けとらないほうがよい。空間は、ウルリヒの主観とはやや離れたところで空間どうしで関係しあってウルリヒの内的状態を反映しつつ状況を街路につくり出す。

つまり、第1巻において街路にあの異様な無名の集団が現れ、街路の建物からは人間の自己疎外の姿が想起されるが、第2巻になると、こ

の集団は現れず(第2巻8章は第1巻で生じたことを語っている)、とくに「遺稿より」では、街の光景は輝きをおびているということから、街路の光景とウルリヒをとり巻く状況および彼の思考との関係を上記のごとく考えてみたのである。「似たようなことが起きる」との表題をもつ第1巻では、平行運動(ウルリヒにとっては「現実」を意味する)の停滞が、これに距離をおくウルリヒにも重く影響し、また彼自身の思考実験の不毛が意識される。こういう孤独と絶望にたいして、共同体のなかの幸福の形象化として個人の解体より生じた無名の集団の光景が出現するのである。しかし、アガータという分身を得た第2巻(「千年王国へ〈犯罪者たち〉」)以降では、思考は「現実」の直接的拘束をはなれて、渺渺たる広がりの可能性をかなたに予感させつつ、「聖なる会話」が展開され、彼らの歩く街は二重性を保持しながらも、変容の光を受けることになるのである。

街路への移行によってまず生じるのは一種の分裂である。それはできあがった世界と「別の」何かとの落差の反映である。分裂の意識のなかでウルリヒは状況を認識する。認識へと追いこまれる。最初の場面では、街路で、輝やかしさをを感じる一方で、「囚われている」という感情、つまり「自分が獲得したと思っている一切のものによってじつは自分が獲得される」という不安な感情をいだいた。それが自分と自分をつつみこむ世界とのずれの意識、いやこの自分自身が本来的な自我なのかという問いを生む。「この美はどうか?——とひとは考えた——まことに結構。しかしこれが私の美なのだろうか? 私が知るにいたった真理は、いったい私の真理なのか?」「現実、つまり、ひとを誘い、導く、ひとが従い、身を投じるこれらすべての誘惑的なもの——いったいこれが真の現実だろうか。あるいは真の現実、与えられた現実の上にとらえがたく漂うひとつの息吹としてしか現れないものか。」(S.129) 不信の心が感じ

とっていくのは、「生の既成の分類と形式、似たような事ども、すでに幾世代もまえからできあがっているもの、そして言葉を発する舌にとっただけでなく知覚と感情にとっての既成言語」である (S.129)。

現実化の過程のなかで人間が非本来的な存在となる様が、さらに「蠅と蠅取り紙」の比喻であらわされる。

「こちらでは細い毛にくっつき、あちらでは彼らの動きにからみついては、徐々に彼らをつつみ込んで、ついに厚い覆いのなかに埋めこんでしまうが、その覆いは彼ら本来の姿にはほとんど合わぬものとなっているのだ。」——しかしもっと奇妙なのは、「たいていのひとがそれに気づかない」ということで、見知らぬ人生が「彼らのなかに入りこんで彼らの人生となる」のである。(S.131)

こうして現実化し固まっていく世界の中味はじつは混沌にはかならない。目的なきエネルギーの放出の様相を窓際で脳裡に描いたウルリヒは、「なんでもすきなことができるのだ」(S.131)と肩をすくめてつぶやいたように、事柄どうしの関係のなかでそのつど価値ができあがり、現在善とされるものも、偶然にそのようなものになったにすぎず、この道徳的問題が小説全体を通じてのテーマになっている。聖堂の前に立ったウルリヒが、「人間はこういう見事な建築物を建て、維持することができるが、それと同様に容易に人食いにもなれる」(S.130)ということを考えるのも、そのような価値規準喪失の時代の姿を思うからである。混沌をはらみながら世界は世代を経るなかで定式化され固められて目の前にあるのだ。しかも、「若干の個人的なこまごましたことを別にしては、世界をできあがったものとして見ることは、たいていの人間にとって、快適で心の支えとなるのかもしれない」のである。「似たような事ども」に身をゆだねる人間のありかたが、街を歩くウルリヒの頭をいま占めている。とある広場に出た彼は、そこに並ぶ建物のなかでかつて行われた公

の論争と精神の高揚を思い、それら建物がいまや「古風な帽子をかぶった実直な小母さんのように」ひかえめに立っているのを眺めるのである。そして街路を描くこの第34章は終わる。

第1巻にはさらに、夜の街路を歩くウルリヒの姿が描かれる。街路における二重の知覚、あるいは分裂は、昼の光景とはまた異なった鋭さを示すであろう。非本来的な覆いを一瞬剥ぐ抽象化の閃光もまた闇のなかでその仮借なさを増すのである。

## II. 夜の街路と特性のない男

夜の街路といえば、まずモースブルガーの娼婦惨殺場面(第1巻8章)がなによりも頭に浮かんでくるであろうが、ウルリヒが夜の街を歩くシーンがいくつかあり、『特性のない男』の街路場面は、じつは第1巻7章の夜の街での殴り合いから始まる。

### 1. 夜道での殴り合い

モースブルガーの殺人にしても、この夜道での殴り合いにしても、事件そのものはありふれたものである。夜更けの人けのない通りを考え事をしながら歩いていたウルリヒが、三人の屈強な若者のひとりに触れたのが原因なのかもしれない、突然の殴り合いとなる。彼のまえに憤怒の表情をたたえた三つの顔が現れ、最初の男が飛びかかってきたときに、相手の顎へ一発くらわして機先を制して飛び退いたものの、背後からの何か重い物による一撃でがっくり膝をつく。

出来事はそれだけである。しかし、翌朝、床のなかで昨夜の冒険について思いをめぐらす彼の想念とその夜の彼の感情とがからみあうがごとく描かれていく。自分が「失策をおかした」という意識、習慣化されていたものの思わぬ狂いを考えることから、反省は始まっていた。しかし、思考は思わぬ展開を示して、秩序の支配する街路のすぐ傍らに「ジャングルのなかにいるのと同じ力と意志を要求する別の街路」があ

るといふこと (S.27) の確認から発して、こういふ「人生の矛盾」にたいするわれわれの態度の問題へとすすむ。

「これは、人生の矛盾、人生の一貫性のなさ、人生の不完全さという周知の事柄を示すもので、人はそれにたいして微笑むかあるいは溜め息をつく。しかし、ウルリヒはそうではなかった。彼は、オールドミス叔母が若い甥の不法作法にみせるような、人生の矛盾や不完全を甘受するときの諦念と溺愛との混合した態度を憎悪したのである」(S.27)

矛盾に対して微笑みもせず溜め息もつかないとすれば、どうするのか。

特性のない男はいま柔らかなベッドに横たわって、昨夜の冒険を思い起こしているが、「こうしてベッドに留まることは人類の諸問題に含まれる無秩序から利益を引き出すことになるのは明らかだったが、それでもすぐにベッドから飛び起きることだけはしなかった。」(S.27) つまり特性のない男の非行動性が、殴り合いの翌朝のベッドという場面において謎めいたかっこうで表現されるわけであるが、そこに浮かびあがってくるのは、「全体」の概念である。

では、「ベッドから飛び起きない」のはなぜか。

なぜなら、「全体の秩序を求める努力をするかわりに、自分だけ悪を避けて善をなすなら、それはいろいろな意味で、事柄を犠牲にして良心と性急に折り合いをつけるだけのことであり、短絡であり、個人的な次元への逃避でしかないからだ。」(S.27)

ここで使われている「全体」の意味は、生の全体を包括するものことで、既存の秩序および道徳にそくした善悪の観念を超えるものにほかならず、たとえば、「さまざまな可能性の無限の全体を生きる」(S.1027) というコンテキストのなかで捉えるべき言葉である。

先の「諦念」は、この「全体」とのかかわりを断念することであり、個人的次元での処理のひとつである。この問題は、つぎの、「二人の

ウルリヒが歩く」場面で扱われることになる。

## 2. 裸の名詞としての精神、二人のウルリヒ

時代の状況を己の身にそくして感じながら歩いているウルリヒが、突如分裂を意識し、分裂のなかで事柄を見通す。しかもこの第40章はアイロニカルな結末を迎える。

いつからウルリヒが歩いているのかはわからない書き方だが、ウルリヒが街路を歩いているうちに、日が暮れていて、「都市の凍死し石化した肉体」のなかで (S.153)、彼は感じ、考えている。「精神」がテーマである。精神は「他の何ものかと結びつく」ことによって、この世界において「最も広く普及したもの」となっている (S.152)。すなわち、「忠誠の精神、愛の精神、男性的な精神」などの形で精神は「確固と」存在し、またわれわれは日常、「これこれしかじかの精神」という具体的観念形態となった精神を支持する (S.152)。諸々の事物のこの世界での現実化と同じように、精神も夾雑物に覆われることで現実に「確固」たる位置を得る。しかし「精神」そのものというものは存在するのであろうか。ムージュルは他のものと結びつかない精神そのものを「裸の名詞としての精神」という言葉で表現し、いきなり都会の夜の淋しい道端に出現させてみる。迷い出た亡霊のように裸の精神は見える。

「しかし、精神がひとりぼっちで、裸の名詞として、なにかシーツの一枚でも貸してやりたい幽霊のように何も身につけずに、そこいらにぼつんと立っていたら、——いったいどうであろうか。」(S.152)

抽象化、つまり夾雑物を剥ぎ落とす、あるいは J. Schmidt の表現にならえば「現実を燃やしつくす」ことのイメージはすでにこの第1巻40章にその片鱗が示されていると言えよう。そういう抽象化された姿を現実のなかから見た様相は、裸の精神の「幽霊のように」孤立して立っている姿が暗示する。しかもそれは「孤立のなかでは出会いたくはない」(S.153) 代物とし





のように木から木へと飛び移っているのに、人間が根ざす暗い領域では、言葉の親切的な媒介が彼にはないのである。」(S. 155)

『テルレス』以来ムージルの作品をつらぬく言語の問題がこのようにして姿を見せたとき、突如街路はウルリヒにたいして異常な変化を示した。

「彼の足の下で地面が勢いよく流れだした。彼はほとんど目をあけていられなかった。」特性のない男はいま言語喪失の意識のなかで異界からの作用を全身で感じはじめる。街路における「別の状態」への移行が始まっている。しかしここでもウルリヒは奇妙に二重の状態にあった。「感情は嵐のように吹き荒れている」が、「表面は静まりかえった嵐」であった。「ウルリヒの感覚は澄みきっていたが、目は行き交うひとのすべてをいつもと異なって見ていた。」(S. 155)

「ウルリヒはなにひとつ言葉にできなかったが、しかしこの瞬間彼は、一生だまされながらなおも恋せずにはいられない恋人を思うように、あの『精神』という奇妙な体験のことを考えた。彼が出会うすべてのものに彼を結びつけているのはこの体験であった。というのも愛しているときには、すべてが、苦痛や嫌悪ですら、愛であるからだ。木の小枝と夕暮れの薄明かりのなかの青白い窓ガラスが、深く彼の内部に沈潜して、言葉では言い表しがたい体験になっていった。事物は木と石からではなく、ある壮大な、限りなく繊細な非道徳性からなっているように見えた。それは彼に触れた瞬間に、深い道徳的な感動にかわるのだった。」(S. 155/156)

街路における内と外の融合の瞬間であり、これまで述べたことのすべてがこの場面に流入するかに思われるが、小説はこれから始まるのである。

しかしこの外界との融合は「微笑の間」(S. 156)しか続かず、融合を感じた世界とは別の固い世界が、ウルリヒを現実の路上の小さな事件

に巻き込み、そのため警官に逮捕されたウルリヒは、「彼を非人格的で一般的な要素に分解してしまう」国家機関の手に落ちる(S. 159)。結局彼はラインスドルフ伯爵の名を出すことでそこから解放されるが、翌日伯爵邸を訪問したウルリヒは、「平行運動」の名誉秘書に任命され、このオーストリア的愛国運動に関与する次第となり、第40章は終わる。

これも、ムージルの「構造的イロニー (die konstruktive Ironie)」(S. 1939)のひとつとみてよいのではないか。

### 3. 帰り道、つきそう影

平行運動は停滞していた。大いなる理念はいぜんとして見つからず、しかもある日、このオーストリア的愛国運動にたいしてオーストリア内部の親独派の仕掛けた大衆行動が帝都の街路を騒然とさせた。ラインスドルフ伯爵邸に押しよせるデモ隊を、窓から眺めるウルリヒは、窓の内と外との世界がひとつになろうとする「奇妙な空間的反転」(S. 632)を体験する。昼の騒動が嘘のように静まり返った夜道を家にむかうウルリヒの姿が、第1巻最終の章よりひとつ前の第122章において描かれる。

街路に出た主人公の知覚が独得の「二重性」をおび、あるいはむしろ「分裂」を体験することは、上記の「二人のウルリヒ」においてもっとも激しく表現された。既存の世界にたいして、ある「別の」世界が突然知覚されて、その断層に落ち込みつつ彼は一瞬外界との融合を体験する。分裂がその前提であると言っても言い過ぎではあるまい。「帰り道」と題されたこの章は、家への道、「自己への道」<sup>14)</sup>を描くとされるが、ここでも自己のある分離、しかも微妙なかたちで「二人のウルリヒ」が生じているのである。

まず高い建物にはさまれた街路に立ったウルリヒの感じ方にそのようなほのかな自己分離が予感される。そのとき彼の頭ににまだ残っていたのは、先程別れたアルンハイム、つまり現実

にしっかりと根ざした特性をもつ男のことであった。しかしウルリヒはいま、ある不安定な非現実的な領域へと入っている。ウルリヒは、「劇場にいるように何か起きるといふ感じ」をおぼえ、同時に「自分がこの世界のなかの一現象になっている」と感じた。現実の自己とはちがう、漠とした自我が、暗い非現実的空間の一部となり、うごめき出したように見える。そのうごめくものは「実際よりも大きく感じられてくる何か」であり、その何かは「音を反響させ、照明を受けた平面を通り過ぎるときには、自分の影を引きつけていた。いやにびよこびよこ動く道化師のような影であった。」外界との奇妙な戯れである。影が戯れる光景を見つ、「ひとはなんと幸福な気持ちになれるものだろう！」と彼は思う (S. 647)。自我と外界との一致の幻想を、彼はアイロニカルな口調で「幸福」と呼ぶわけである。が、しかし、暗い通路に入ったとき、「四方の隅から暗黒がとびだし、ほんのり光の見えるくぐり抜けのあたりには、不意打ちと殺害の気配がゆらめいていた。(……) 彼はもはや自分の影と反響に喜びをおぼえなかった。」そして彼は、「自分がいまや、己の入りこむべき枠を見いだせぬままおろおろと人生の歩廊をさまよう幽霊でしかないように思われるのだった。」 (S. 648)

「空間の連想性」<sup>15)</sup>がこの章ではことのほか顕著である。空間はウルリヒに何事かを連想させる。しかし、そのつど彼が会うのは、自己分離、自己を異質なものに思う感情にほかならない。狭い暗闇から広場に出た彼には、そこに立つ建物の窓の明かりは平穏な生活の象徴に思われた。「彼はこの平和を嗅ぎとった。」 (S. 648) この平穏さをつくっているものへと注意がむけられるのであるが、そこでも一種の自己の異化が突然生じるのである。すなわち、どうしてだか彼は、最近ひさしぶりに見た幼年時代の写真を思い出した。以前には見えなかったものがいま見えてくる。「かつての自己満足の瞬間につつまれた自我が古い写真から彼を見つめてい

た。あたかも接着剤が乾いてしまったか、剥げ落ちたかのように。」——あの「剥落」と「自己分裂」に共通するものが、昔の自分の写真との間に生じていると言っよいのではないか。そして、「彼の幼き日の柔和で空虚な顔」はいま、闇のなかで無名の映像として彼に「自己満足につつまれた瞬間の自我」を指し示している。彼は「この少年になんの親近感もいだいていなかった」 (S. 648) ののである。

こうした自我についての場面をはさんで、彼が先に「嗅ぎとった平和」の中味が明らかにされる。「このような毎夜の平和をつくり出しているのは、一種の悟性の遠近法的短縮 (eine Art perspektivischer Verkürzung des Verstandes) なのだ」と。遠近法的短縮とは、「矛盾を解決するのではなく、矛盾を見えなくする」術で、それによって「自己と生活との融和の感情を継続」していく。それはちょうど、「長い並木道で樹木と樹木の隙間が〔見る者の目に〕ふさがっていくのと同じで、目に見える状況はいたるところで目に合わせて位置がずれ、その結果、目に支配されたひとつの風景ができあがる。その風景のなかでは、差し迫った近くのものが大きく見え、しかしそのむこうにあるものは巨大なものでも小さくなり、隙間がふさがり、ついに秩序ある滑らかな形の全体が完成する。」 (S. 649) かの有名な「物語の糸 (der Faden der Erzählung)」もこの「悟性の遠近法的短縮」のひとつで、多様な人生の出来事を、物語りつつ、一本の糸に通していくように時間的空間的に秩序づけ整理する方法であり、ひとはこの一次的秩序づけのなかで「安らぎを得る」のである (S. 650)。

しかしウルリヒはいま、「自分にはこの原初的な叙事性が欠けていること」を確認するのだ (S. 650)。この場面の行きつくところは、つまり、平行運動の推進者たちのように大いなる理念や全体の概念で統一性をもたらして生を秩序づけるのではなく、多様な生に身をさらして思考している特性のない男の、自己のあり方に関する

る再確認であって、それはまたこの長編小説の態度表明をも意味するのである。

「悟性の遠近法的短縮」から解きはなされた事物は、夜の闇のなかを歩く特性のない男にたいしてすでにそれら独自の作用をおよぼしていた。都会の夜に突然、街道と村を出現させ、田園独特の「魂の単調さ」を彼の心に呼び起こしたのは、冬の公園に立ち並ぶ「裸の樹木」とひとつの「水たまり」だった<sup>10)</sup>。大都会のささやかな事物から連想されたこの「魂の単調さ」は、「魂のなかから突如現れる空虚な美しい空」を呼び出し、空虚な美しい空の下では、たったひとつの物、ひとつのなにげない出来事ですら、それらは周囲の世界とかかわり、何かを起こしつつ物となり、出来事となる。しかもそれ以外の物や出来事は存在しないかのような強烈さをもってそれは生じるのである。虚空と生起の鮮烈さをムージルはつぎのような比喻であらわす。「こういう空を前にしたら、一頭の雌牛が道の真ん中で輝きだすかもしれない。それ以外のことはこの世に何も生じないかのようなものである。それが生起の激烈さというものだ。」(S. 649)そしてそれと対照的な、無数の出来事に囲まれながら出来事を自己に結びつけられない都会の生活が想起されるのである。

この小さな公園を出て、道路の端まできたとき、「ある影のようなもの」が近寄ってきた。売春婦であった。この別の影とともに、夜の街路でのモースブルガーの娼婦惨殺と平行な場面をもって夜道の章は終わりに近づく。彼は一回の訪問にほぼ相当する紙幣を女の手のにぎらせるが、こうした女との場面ははかない「牧歌劇」のような、しかしまた「どさ回りの人情劇」の印象を彼の心に残す(S. 652)。彼は「病的な喜劇役者」モースブルガーを思い浮かべる。すべては、彼が冒頭に感じた「劇場におけるがごとく」起きているのである。「彼もあの不幸な夜、今日の自分と同じように歩いていたのだ」と思うが、そのとき彼は、「何か波のように彼をもち上げるのを」感じた。——体の平衡の

喪失。そして心臓が収縮する一方で、観念は混乱しつつ無限に拡大し、やがて一種の虚脱感をともなう快感のうちにそれは止む。(S. 652)

だが、この異常な空間的知覚と内的混乱は、醒めた洞察へと通じる。他の者たちはモースブルガーを「彼らなりの仕方」で処理し、「彼らの道徳再建のために」彼を弁護しようが、ウルリヒは自分のいただく「分裂」はそれとは異なるのを意識する(S. 653)。しかしムージルはこの醒めた認識で章を終わらせることをしない。言語化された認識にたいして、つぎの瞬間には身振りによって何かさらに別のものが表現されるのである。

つまりそのとき彼は、「手の甲で何かをわきへ払い捨てるかのような」動きをして言った。「こういうすべてが決定されねばならない！」と。

「こういうすべて」とは、この小説の初めに述べられる、己の能力の使用目的を求めて「一年間の人生からの休暇」(S. 47)を取って以来、家に帰る途中のこの瞬間までのすべてのことを意味していて、そのすべてが「不可能へと通じていた」という認識をウルリヒはもつと同時に、彼はいまや、「いまや他のあらゆるひとのように到達しうる目標のために生きるか、あるいはこの〈不可能〉を真剣に考えるかのどちらかだ」と感じたのだ。この切迫した気持ち、多様な生の事象を途方もない忍耐をもって生きようとする特性のない男の胸のうちから発せられるこの二者択一の言葉が、この章を締めくくろうとしている。だが、彼が自分の家の近くで感じるのは、声に出して言った言葉の切迫さをどこかで吸収し無音にしてしまう空洞を含んでいて、この章の冒頭の「影」のとらえどころのなさに親しいのだ。つまりそのとき彼が感じたのは「なにやら勇気づけてくれ、行為へと流れこんでいく、しかし内容空疎な、それゆえにまた奇妙に自由な感情」だった。(S. 653)

われわれがたどりつくのは、あの平行運動が大いなる理念を見いだせぬまま、何かをなさ

ねばならぬという焦燥 (ラインスドルフ伯爵: 「何も考えが浮かびませんが, 何かがなされなければなりません」 S. 590) と, あるパラレルな関係のなかでなされる, 特性のない男の意思表示にはかならない。

ウルリヒの「自己への道」を意味する「帰り道」は, 夜の街路において, こうして幾重にも彼の思考と感情, 言葉と身振りに微妙な断層または分離を生じさせつつ別の世界を一瞬経験させていくのであった。家に帰りついたウルリヒを待っていたのは, 父の死を告げる電報で, この一通の電報とともに, 唐突な感じも与えつつ第1巻は終わり (最終章「転回」), 第2巻に入ると「忘れられていた妹」アガーテが登場する。ウルリヒは, 自分の影の代わりに, 若く美しい肉体を有する分身を得るのである。いまやこの美しい分身と彼は街を歩く。その姿と街の輝きをわれわれはすでに昼の街路風景のなかに見たのであった。

これまであつかった章は,

#### 〈第1巻〉

- 第7章 夜道での殴り合い。
- 第8章 モースブルガー娼婦惨殺の記述。
- 第34章 目的なく街を歩く。〈顔・水に漂う泡〉。若き日の街路光景を想起。
- 第40章 夕闇のなかで, 〈裸の名詞としての精神〉を思う。突如〈二人のウルリヒ〉。異様な空間的知覚。路上の事件に巻き込まれ, 「平行運動」に関与することとなる。
- 第122章 平行運動の停滞。夜, 帰り道。自分の影, 幽霊のようにさ迷う自我。〈一種の悟性の遠近法的短縮〉。売春婦・モースブルガー。〈こういう一切が決定されねばならない〉。

#### 〈第2巻〉

- 第8章 目的なく街を歩いた経験をアガーテに語る。〈腕・脚・歯の軍団〉。異質の感じと心地よさ。〈神々の原神話〉

を説明。二つの生の層。

- 第12章 街を歩いた時の話より二つの層の話題へ。
- 第22章 市電と街路との〈視覚的衝突〉。市電を降り街を歩く。アガーテを想う。
- 第28章 市電のなかの不思議な美少女の話。ウルリヒとアガーテは街を歩いている。

#### 〈遺稿より〉

- 第47章 ウルリヒとアガーテが街を歩く。〈生独得の二面性〉。輝きにみちた街の印象。
- 第50章 ウルリヒの日記のなかの, 二人が街を歩いた時の記述。

#### 注

- 1) 「R. ムージルの『特性のない男』について(三)——小説空間における〈窓〉の機能——」(横浜国立大学経営学部, 経営学会『横浜経営研究』IV/3, 1983年12月). テキストは, Musil, Robert: *Der Mann ohne Eigenschaften*, Gesammelte Werke, Hrsg. von A. Frisé, Bd. I, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. 引用箇所はこれまでと同様カッコ内に示す。
- 2) Pott, Hans-Georg: *Robert Musil*, München (Wilhelm Fink) 1984. S. 109.
- 3) Rasch, Wolf Dietrich: *Musil. Der Mann ohne Eigenschaften*. In: *Der deutsche Roman*, Bd. II, Düsseldorf (August Bagel) 1963, S. 387. —「交換可能な (vertauschbar)」。なお, R. ムージルの『特性のない男』について(一) (『横浜経営研究』II/1, 1981年6月) S. 9~14 において, 第1章の解釈を試みた。
- 4) Schmidt, Jochen: *Ohne Eigenschaften. Eine Erläuterung zu Musils Grundbegriff*, Tübingen (Max Miemeyer) 1975. S. 77 —「抽象化 (Abstraktion)」「特性喪失 (Eigenschaftslosigkeit)」。
- 5) 1980年5月ウィーンで「ローベルト・ムージルの作品のなかの都市及びその性格」の表題のもとに, ムージル・シンポジウムが行われ, *Literatur und Kritik*, Heft 149/150, Oktober/November 1980 に収録されている。「無名性 (Anonymität)」については, 例えばそのなかの Karthaus, Ulrich: *Die Anonymität des Städters*, S. 550~560. また, Pott, H.-G.: a.a.O. S. 132.
- 6) Musil, R.: *Tagebücher*, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1976, Bd. I, S. 2. なお, 注3

- の『横浜経営研究』II/1, S. 14~16 参照。
- 7) Heydebrand, Renate von: *Die Reflexionen Ulrichs in Robert Musils Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«*, Münster (Aschendorf) 1966. S. 10~11.
- 8) Schmidt, J.: a.a.O. S. 77~78.
- 9) Polheim, Karl Konrad: *Das Bild Wiens im Werk Robert Musils*. In: *Literatur und Kritik*, Heft 191/192, April/Mai 1985. S. 37~46. 注 10を参照。
- 10) 注 9の Polheim の指摘 (市電は「く似たようなことが起きること」,つまり無意味な偶然的な歴史的流れの象徴)である。a.a.O. S. 44)のように,市電もひとつの場となる。第 1 卷83章では,ウルリヒが市電に乗っている。「数百キロの人間たちをゆさぶっては彼らで未来をつくり出す機械」,「明るく照明のついた揺れる箱」のなかでウルリヒは,「彼らは百年前は同じ顔をして郵便馬車に乗っていた。そして百年後は,彼らはどうなっているか知らないが,ともかく新しい人間として,新しい未来の機械のなかにいまと同じように坐っているであろう」と思い,こういう歴史の流れに「無抵抗に身をゆだねる」姿に怒りをおぼえる。そして,第 2 卷22章では,市電に乗って家にむかうウルリヒの頭のなかに「人生の無思慮」の思いが渦巻いている。そのとき彼は突如,市電と街路との「視覚的衝突」を経験し,市電を降り,街路を歩く。
- 11) この47章の別の稿 (S. 1204~1211) では,ウルリヒが「以前彼が陰鬱な気分のおきにしばしば《似たようなことの起きる世界》と名づけたもの」について語る場面がある (S. 1210)。そして気がついたときには二人は「万人の尊敬を集めている広場」を横切るところだった。彼らの目に入るのは,「こまごまと過剰に装飾を身につけたバロック建築の模造」である die Neue Universität と「成功した謝肉祭の茶番めいて見える」二つの尖塔をもつ《新ゴシック式》の教会,宮殿のような銀行,陰気な裁判所兼拘置所の建築物で,その風景をひと目見ただけで,「すでにできあがったものの堅固さと同時にこれから先の歩みがそこですでに準備されていること」が把握される (S. 1210),と書かれていて,「似たようなことが起きる」のテーマを鋭く表現しつつこの街を行く二人の章を終えている。なお,注 9の Polheim, K. K. S. 40 参照。
- 12) 街路の叙述にしても固有名詞が出てくるのは,注 11に記した die Neue Universität などぐらいで,そもそもウルリヒがどこを歩いているのかは具体的に示される場合はむしろすくない。また,「街路を歩く」からは除いたが, Hofbibliothek の前の,明らかに Josefsplatz で,ウルリヒ,ディオティーマ,アルンハイム,そしてシュトゥムが立話をする場面があるが (第 1 卷114章),その広場に立つヨーゼフ 2 世の騎馬像について細部描写は,Polheim が問題とするように,ヨーゼフ 2 世のそれとは確定しえない無名の像を表現しているのである。Polheim, K. K. S. 41 参照。
- 13) 先の第 2 卷12章は神秘思想家たちの文の話題から始まって「街を歩く」ことが入りこんできたが,神秘的体験と言語の問題についてつぎのような興味深いことがウルリヒによって話される。「純粹に現象にとどまる」のではなく,「自分たちは神を直接体験すべく神に選ばれているのだ」といったいい気な確信によって不純にされた判断」が混入すると,「この瞬間から彼らは,名詞も動詞もない,言い表しがたい知覚をぼくらに語ることをもちろんやめ,主語と動詞をそなえた文章で話だすのだ」と。
- 14) Pott, H.-G.: a.a.O. S. 108.
- 15) Pott, H.-G.: a.a.O. S. 109.
- 16) 裸の木はかつて孤独な思考の場から庭に出たウルリヒの前に黒々と立ち,モースブルガーの巨大な幻影を浮かびあがらせた (S. 257) ものとして印象に残っているが,「水たまり」について言えば,第 2 卷22章(市電を降りて歩く場面)で,「水たまりは,すでにあらゆるひとに思わず知らず大洋よりも,はるかにしばしば,より強烈に深さの印象を与えてきた」とウルリヒは考えるのである。

[ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授]